

## 創造的な生涯のための新しい労働システム

### [研究メンバー]

主査	伊丹敬之	一橋大学教授
	樋口美雄	慶應義塾大学教授
	松岡正剛	編集工学研究所所長
	内館牧子	脚本家
	大橋 力	放送教育開発センター教授
	加藤敏幸	連合労働政策局長
	丹野宜弘	(株)神戸製鋼人事部長
	田路 正	(株)ジャスコ労使福祉部長
	エレン・ニアーマン	日本電気(株)人事部
事務局	西山邦彦	(株)電通総研研究部部長
	馬場章正	(株)電通総研プロデューサー
	佐藤 修	(株)電通総研嘱託
	片岡 弘	(株)電通作画開発局部長

### [報告書目次]

1. 本研究会の目的
2. 日本人にとって創造的な生涯とは何か
3. 日本人の生涯の中での労働
4. 新しい労働システムに向けての課題
5. 新しい労働システムを考える上での基本的な視点  
—本研究会からの提言にかえて—
6. 今後の研究課題

### [内容要旨]

本研究会は、これからの日本人のゆとりや豊かさを考えるにあたっては、マクロ環境や制度からだけでなく、生活者の価値観などからの、多角的なアプローチが必要になるとの視点から始められた。そこで、日本人を「労働者」ではなく「生活者」として捉えるところに留意した。現在多くの日本人は、現実的には労働が人生の主要な時期の多くの部分を占めているものの、単に「労働者」や「企業人」としての存在だけではなく、「地域住民・消費者・家庭人」等の存在でもあるからである。研究会では、各界で活躍し広い見識を有する人々によって、さまざまな立場・視点からのアプローチを試み、現代人の働き方の本質について考察を行い、今後の労働システムの方向についての提言をすることとした。

## I 日本人にとって創造的な社会とはなにか

まず、日本人がこれから真に豊かな生活、創造的な生涯を送っていくため、その基盤となる社会形態についての考察を行い、経済性と人間性を兼ね備えた新たな社会形態として、「ボランティア・エコノミー社会」の創造が提案された。第二に、生活者の価値観については「働くことの意味」等生活実態に則した「本音」の討論がなされ、さらに将来を展望し、あるべき状態を描きそこから創造的な生涯をクリエートしていく「グッドライフ構想」も報告された。第三に歴史的視点から、日本の伝統的な労働観余暇観について報告がなされ、「移ろい・好き・はずみ」といった意味の重要性が指摘され、特に「ツトメ」と「カセギ」は、日本人の労働を考える上で本質的な概念であるとの認識で一致した。

## II 日本人の生涯の中での労働

日本人の中で、労働の位置づけが変わってきている。従来の「ツトメ・カセギ」に新たに「アソビ」という要素が加わり、その関係性も従属的、分極的ではなく同等・鼎立になろうとしている。それは、人間がカセギだけでなくツトメやアソビを求める存在であり、金銭的な評価だけでなく、充足感や快楽、他者からの評価などを求める、多重な存在であることの証左でもある。

## III 新しい労働システムに向けての課題

従来の労働システムは工業化社会に対応したもので、「効率性の重視」と「労働力の供給市場」としての特徴を持っていたが、諸環境の変化の中新たなシステム作りが課題となっている。

なお、従来の日本的雇用システムが実質的には崩れてきていて、労働市場の流動性と能力給のウエイトが高まってきていること、欧米で進行しているスポット・マーケットのシェアが日本においても高まりつつあることなどが報告された。

## IV 新しい労働システムを考える上での基本的な視点

研究会は、人間を単に労働者（カセギを求めて労働に従事する者）としてのみではなくより多重な存在として捉える、という基本的な視点から、新しい労働システムの基本的な考え方について、

- ① 「もう1枚のカード」を持てる、② 「もう少し自由裁量時間」を持てる、③ 創造的な商品と企業活動を生み出す、

ことを提起し、さらに、新しい労働システムのチェックポイントとして、次の点を指摘した。

- ① 「悪平等」を推進させないこと、② 一部の強者のものでないこと、③ 閉鎖的でないと、④ 国際的視野を持つこと

研究会は「人間がもう1枚のカードをもつことをサポートするシステム」を提言したが、具体例として次の点を示した。

(1) <企業・組織レベル>

- ① 組織労働の中での「コラボレーション」の創造、② 選択と選別の実施、③ 加点評価システムの導入、④ 人材の交流

(2) <制度レベル>

- ① 雇用安全保障制度の確立、② 組織労働の標準化、③ 労働市場の多様化・流動化の促進

V 今後の研究課題

今後、具体的な構想に向けて、

- ① 新しい労働システムの前提となる人間観、② 労働におけるもう1枚のカード、③ 創造性を高める労働システム

等の、研究が望まれる。